

Ф. И. Чუच्चेフ政治詩試訳(11)

大 矢 温

はじめに

「チュッチェフ政治詩試訳(1)～(10)」に引き続いて、主にタラーソフ編集のチュッチェフ著作集『ロシアと西欧』において「哲学詩」として分類されたものを対象にして、六巻本全集をテキストとして、チュッチェフの政治思想を分析する上で手がかりになりそうな詩の解説を進める。

1) 無題¹

夜の空はかくも陰気に、
全ての方から覆い隠した。
それは脅しでもなければ思いでもなく、
それは気怠い、憂鬱な夢。
火色の明星だけが、
次々に燃え上がり、
聾啞^{デーモン}の悪魔のごとく、
お互いに語り合う。

予め決められた合図に合わせるように
突然空の帯はひらめく、
そして急速に闇の中から出現する
草原と遠くの森が。

そしてほら全てはまた暗くなり、
全ては張り詰めた暗がりの中で静まりかえる——
あたかも秘め事が
謀られてるかのごとくそこで——高みで。

水平線の雲の切れ間から朝日が昇る情景である。「オーフスツク1865年8月18日」という書き込みから1865年8月の作と考えられている²。

第2聯2行目で「ひらめく」「空の帯」とはこの詩作の直前、1865年7月の「無題(「東」は疑わしげに沈黙する)」³にも使用されている表現である。頭上には厚い雲が覆い、東の水平線の近くに雲の切れ間がある時、日の出と共に朝焼けが帯状になって「赤くなりながら」「明るく輝きだした」のであろう。しかし、「東」の大国ロシアの覚醒を織り込んだ前作と比べると、この作品では夜明けの後で「全てはまた暗くなり」「暗がりの中で静まりかえ」ってしまう。

スラヴ民族の覚醒と「東」の大国ロシアの使命、といった政治的な含蓄に富む前作に比べると、ここではむしろ、夜の闇と「明星」、草原や森とそれらを出現させる「闇」といった、シェリングの影響を感じさせるチュッチェフの初期の作品において特徴的な対比を見ることができよう。夜の闇というカオスの中で自意識として自らを定立する星、というおなじみのテーマである。

2) 1865年11月23日⁴

心がうずかない日はなかった、
過去に悩まない日はなかった——
言葉を探したが、見つからなかった——
そして日ごとに身が細りやつれていった、——

あたかも、灼けるような憂鬱さで
望郷の念に苦しむ人のごとく

ひょっとして彼は気づくかも、
波によって海底に葬られたのを。

亡きエレナ・デニーシエヴァの思い出に捧げて1865年11月に作られたものとされている⁵。「無題(おお、この南)」⁶、「無題(受難者のような私の停滞)」⁷に通じるテーマである。

チュッチェフはデニーシエヴァを1864年8月に肺結核で失った直後に傷心を抱いてロシアを出国している。その年の暮れになってニースに於いて「モスクワでの仕事」を今後の生き甲斐にしようと帰国を決意し⁸、65年3月には帰国する。ところが帰国直後の5月初めにデニーシエヴァに続いて、彼女との間に生まれた二人の子供エレナとニコライを相次いで失い、さらに5月17日には自らの母親までも失ってしまう。チュッチェフにとってはこれら一連の事件が精神的に大きな打撃であったであろうことは想像に難くない。これらの詩作の時点でも彼の心の痛手は癒えていない。「痛みと無力」におののきながら⁹、海というカオスを渡るすべもない。自意識のシンボルである「小舟」は「壊れ」「波にうち捨てられ」¹⁰、自らは「波によって海底に葬られ」ているのである。

3) スヴォーロフ公爵に¹¹

二つの性質の違う志向を
御前は自らの中に統合した——
魂の救済のない佯狂と
鋭さのない冗談と。

自然自体、どうやら、望んでいたのだ
御前を据え付け、運命づけることを
無責任な仕事に
野放しの弁説に。

ここで名指しされているスヴォーロフ公爵とは、アルプス越えで有名なアレクサンドル・ヴァシリエヴィッチ・スヴォーロフの孫のアレクサンドル・アルカヂェヴィッチ・スヴォーロフ(1804-1882)のことである。このA. A. スヴォーロフについては、ムラヴィヨフによるポーランド弾圧を人道的立場から批判したとして、チュッチェフは詩「A. A. スヴォーロフ公爵閣下に」を書いて批判している¹²。これら2編の詩にも見られるように、スヴォーロフ公爵に対するチュッチェフの態度は厳しい。

手稿への書き込みから1866年4月の作とされている¹³。同じく66年4月にはカラコーゾフによる皇帝アレクサンドル二世暗殺未遂事件が起きているが、スヴォーロフ自身はこの事件の責任を問われてサンクト・ペテルブルクの県知事將軍を解任されている。急進主義者に対する「怠慢」の責を問われたためである¹⁴。

4) 無題¹⁵

信用が大混乱した時
 何とか尽力するでもなく、
 ただ浅瀬に乗り上げ、
 海老のように腰を据えている、——
 誰が彼を救うか、助けるか？
 まったく誰が、漁師以外に。

1866年6月の作。C. A. グレイク(1827-1887)が財務次官になったことを皮肉ったものとされる¹⁶。グレイクはエカテリーナ女帝時代の有名な海軍提督C. A. グレイクの孫で貴族幼年学校卒業後に近衛騎兵隊に入った。クリミア戦争に従軍した後、1866年に突如、財務大臣レイテルンの次官として財務省入りし、次期財務大臣と目されるにいたった。しかし本人は財政には関しては素人で、信用危機の際にレイテルンの報告書が理解できなかったことが伝えられている¹⁷。この詩も、グレイクの就任、というよりは、この金融混乱時のグレイク

の対応を「浅瀬に乗り上げ」た「海老」に託して皮肉っているものと解釈できる。

なお、グレイクの就任に対するチュッチェフの言動については、フェオクチストフがその回想の中で記録している¹⁸。

5) 無題¹⁹

彼の柩の覆って

我ら、花輪の代わりに、短い言葉を留めよう：

彼には多くの敵はなかったろう、

お前、ロシアのでないのであれば。

ポーランド弾圧で有名なM. H. ムラビヨフに捧げられたものとされる。「ロシアのでない」とあるが、実際にポーランド蜂起はまさにそのロシアの支配に対して起きたものであった。したがって、ここは、ムラビヨフには敵が多かった、と読むべきである。実際、国外のみならずロシア国内に於いても、ポーランド鎮圧の功によってムラビヨフに公爵位が授けられた時には彼に対して世論は憤り、「首吊り人」の世評が立った²⁰。他方、上記のスヴォーロフに対する詩にも見られるように、ムラビヨフに対してチュッチェフは、ポーランドに対するその強硬処置を一貫して支持している²¹。1866年11月の作とされている²²。

6) 無題²³

老いた力が

我らに衰えはじめ

我ら、古くからの住民として、

新しき移民者に場所を与えねばならない時、――

そのとき我らを救い給え、善き才人よ、

変わりつつある生活に対する；

心狭き非難から、
中傷から、悪意から

新しい客が
彼らに用意された宴の席に着く；
一新されつつある世界に対する、
秘められた悪意から

すでに流れは我々を運ばないという
そして他の人々には使命があり、
他の人々が前へと招命されているという；
苦い認識の憤りから、

意気が盛んなら盛んなほど、古くから
より深く隠れるすべてのものから、——
老人の愛よりも恥ずかしい
口やかましい老人の血気は…

カトコフの詩に対するヴァゼムスキーの批判に反批判して1866年11月初めに書かれたものと考えられている²⁴。ヴァゼムスキーはカトコフの保守主義に対して、彼をゴーゴリの『検察官』に登場する偽検察官のフレスタコフになぞらえ、カトコフの『モスクワ通報』に偽検察官フレスタコフが生きている、として批判した²⁵。カトコフが政府のお先棒を担いで思想統制をしている、との当てこすりである。

他方、チュッチェフのこの詩の内容は、古い老人世代に対して若者を擁護したものになっている。だがこれは、若い世代の急進派を擁護したものではない。ヴァゼムスキーとカトコフという具体的な個人の年齢差を意図したものである。ヴァゼムスキーは1792年生まれなので当時すでに70代半ばの高齢。1817年

(一説には18年) 生まれのカトコフは、当時50歳手前、まだ若い。チュッチェフのカトコフ擁護の姿勢は明確である。

カトコフとの関係について言うなら、チュッチェフは亡き愛人デニーシエヴァの義理の弟であるゲオルギエフスキーを通じてカトコフと親しかった。とはいえ、この詩はヴィゼムスキーを直接名指ししたのではなく、また、第一聯に見られるように、「新しき移住者に場所を与えなければならない」主体は「我ら」となっている。これはチュッチェフのヴァゼムスキーに対する遠慮ではなからうか。ちなみにヴァゼムスキーは、チュッチェフが「ロシアにおける検閲」を書き上げた1856-58年に検閲総局長であり、いわば彼の上司であった。

最後の2行でヴァゼムスキーのカトコフ批判を「口やかましい老人の血気」と批判しながら、チュッチェフはその「恥ずかし」さの度合いを比較するために「老人の愛」を引き合いに出している。おそらくこれは23歳年下のエレナ・デニーシエヴァとの間の自らのスキャンダラスな愛を念頭に置いてのことであろう。

この詩の創作時期である66年11月の時点で、同66年夏以降の皇帝アレクサンドルⅡ世と30歳近く年下のエカテリーナ・ドルゴルューカヤとの愛人関係についてチュッチェフが知っていた可能性は大きい。1818年生まれのアレクサンドルはまだ50歳手前で「老人」とは言えない²⁶。また、この時期のチュッチェフが皇帝の私的なスキャンダルを詩の題材にするとも考えにくい。

7) 無題²⁷

空は淡く青く
光と暖気を呼吸する
そしてペトロポーリに挨拶している
前代未聞の11月で

空気は、暖かい湿気に満ち、
新鮮な緑を潤し

式典の旗を
そよ風に流す。

熱い太陽は煌めきを降らせ
ネヴァ川の深みに沿って——
南色に輝き、南の息吹が漂う、
まさに夢心地

ますます伸び伸びと、ますます愛想良く
和らぐ日——
そし夏の安らぎで
秋の夕べの闇が暖^{ぬく}まった。

夜に静かに燃え上がる
色とりどりの火が——
素晴らしい夜、
素晴らしい昼…

あたかも自然の厳しい官吏が
その権利を
生命と自由の魂に
愛の靈感に譲ったごとく…

あたかも、不朽の体制が、
崩されたごとく
愛し愛する
人の心によって…

この優しい光の中に、
この空色の空の中に——
微笑みがあり、意識があり、
共感のもてなしがある。

聖なる感動が
澄んだ感涙と共に
我らに降る、啓示のごとくに——
そして皆の心に響く…

前代未聞のことを
我が国の賢明な人々は起こした——
そしてダグマラの週は
代々行われ続ける。

アレクサンドル2世の皇太子アレクサンドルとの結婚のために、デンマーク王クリスチャン9世の王女マリー・ソフィー・フレデリケ・ダウマーがペテルブルクに到着した日の歓迎の情景を描いたもので、1866年11月17日の作とされている。

マリー来訪の一週間ほど前からペテルブルクには異常な暖気が訪れていた²⁸。「前代未聞の11月」の好天の中でのデンマーク王女の来訪である。祝祭的雰囲気になった詩である。

皇太子アレクサンドルとデンマーク王女マリーとの愛が自然の秩序をも揺るがした、という内容であるが、実際のところ、マリーはアレクサンドルⅡ世の長男ニコライの婚約者であった。65年にニコライが病死したため、弟のアレクサンドルが兄に代わって結婚したという事情があった²⁹。

8) 無題³⁰

「我らにとっては祖国の煙でさえ甘く、心地よい！」——
このように前の時代は詩的に語った。
が、我らの時代では——才人自身があらさがしをし、
悪臭を放つ煙で祖国を燻している！

1行目はグリボエードフの『智恵の悲しみ』からの引用だが³¹、この詩の内容はツルゲーネフの『煙』の西欧主義的でロシアに対する批判的な傾向に向けられており、チュッチェフは、この詩によってツルゲーネフの変節を批判している、とされる³²。「煙」というキー・タームを軸に19世紀前半のグリボエードフの愛国的な傾向と、「60年代」のツルゲーネフの西欧主義的な傾向を対比している³³。67年4月末とされている³⁴。

9) 煙³⁵

ここではかつて、力強くて美しい、
お伽噺のような森が、ざわめき青々としていた、——
森にはあらず、多様な世界全体が、
幻想と奇跡に満ちていた、

光線が透けて見え、影は震えていた；
木々には鳥の喧噪が絶えず；
茂みの中では素速い鹿が見え隠れしていた、
そして獵笛が時折呼びかけていた。

辻道では、言葉と挨拶と共に、
我々に会いに、森の暗がりから、
何か不思議な光に包まれて、
知人の群れが飛び来った。

何という生ジーズニだろう、何という陶醉だろう、
感情にとって何という贅沢で、明るい宴だろう！
我らにはこの世ならぬ被造物のように思えた、
だが、この妙なる世界は我らに近かった。

そしてほらまたしても秘められた森に
以前の愛着を抱いて我らはやって来た。
しかしそれはいずこ？誰が幕を下ろしたのか、
天から地までそれを下ろしたのか？

これは何だ？何らかの幻影あるいは魔法なのか？
我らはどこに？自分の目を信じるべきか？
ここでは、第5の自然要素のごとく、ただ煙だけだ
煙——スチヒーヤ 歓びのない、際限のない煙！

所々で野火を貫いて
醜い株が突っ立っている、
そして焦げた枯れ枝に沿って
不吉な爆はぜ音と共に白い火が走っている…

いやちがう、これは夢だ！いや、そよ風が吹き寄せ
煙の幻影を持ち去るのだ…
そしてほらまた我々の森は青々とする…
すべては同じ森、素晴らしく故郷ふるさとの。

前半の4聯はツルゲーネフの『獵人日記』の世界であろう。それに続く後半は『煙』を意図したものである。上記の「無題（我らにとっては祖国の煙でさえ甘く…）」に続き、ツルゲーネフの『煙』に対するチュッチェフの批判的な態

度を見ることができる。詩作の時期については、草稿への書き込みから1867年4月から5月に書かれたと考えられているが³⁶、それより先、「ロシア通報」の1867年3月号に発表された時点でチュッチェフはツルゲーネフの『煙』を読んだと考えられる。チュッチェフは早くも4月にはラマンスキーに宛てた手紙の中でツルゲーネフに対する「道徳的精神的無力のニヒリズム」という「侮辱щелчок」を開陳しているほか、ポトキンに対しても『煙』について「国民的感情の欠如」の故に不満を漏らしている³⁷。特にスラヴ会議を控えたこの時期のチュッチェフにとってこの「国民的感情の欠如」は決定的だったに違いない。

なお、このツルゲーネフの『煙』は、一般に愛国的な陣営からは不評を買っていた。たとえばドストエフスキーは、作中の登場人物パトウーキンの口を借りたロシアに対するツルゲーネフの非難に我慢ができず、直接ツルゲーネフに会いに行っている。また、マイコフに宛てた手紙の中でもドストエフスキーはゲルツェンやチェルヌィシエフスキーと共にツルゲーネフを「無神論者」の故に非難している³⁸。

10) 無題³⁹

徒勞だ——いや、彼らを分かるまい。

リベラルであればあるほど、彼らはますます俗悪になるのだ、

文明は——彼らにとって物神崇拜なのだ、

が、彼らはその理想に届かない。

紳士諸君、どんなにその前に平身低頭しようとも、

諸君はヨーロッパから認められない：

その目に常に諸君は

啓蒙の召使いではなく、奴隷に見えるのだ。

Ф. И. Чюच्चेф政治詩試訳(11) (大矢 温)

1867年5月、スラヴ会議直後の作とされている。自ら汎スラヴ主義の唱道者でチュッチェフの伝記作家でもあるイヴァン・アクサーコフは、政府高官やロシア社会一般のスラヴの問題に対する無理解を「憤慨」してチュッチェフがこの詩を書いたと記している⁴⁰。しかし、スラヴ民族間の問題の複雑さを熟知しているチュッチェフは、スラヴ会議の「巨大なナンセンス」の祝祭的な空騒ぎからは一步引いた位置にいた。すでに指摘したように、この詩でチュッチェフが批判の俎上にあげているのは、ロシア政府やロシア社会、つまりロシア国内のリベラルではなく、スラヴ会議に集まったスラヴ系諸民族の独立解放運動家たちであろう⁴¹。

11) 火事⁴²

広く、果てしなく、
厚い雷雲となって、
煙また煙、煙の無底が
地上にのしかかっている。

枯れた茂みが広がり、
草はくすぶり、燃えず、
空の際に透けて見える
焦げた樫の列が。

佷びしい火事に
火花はなく、ただ煙、――
火はいずこ、悪しき根絶者よ、
全権の支配者よ？

ただ密やかに、ただ所々に、

まさに何か赤い獣のように、
茂みをかき分け、
生きた火が走り抜ける！

だが薄暗闇が訪れると、
煙は闇と一体になって、
花火となって
自分の陣営全体を照らす。

スチヒーヤ

自然の悪魔の力の前で
黙し、両手をぶら下げて、
人はわびしく立つ、
寄る辺なき子よ。

1867年7月にサンクト・ペテルブルク付近で野火が起き、煙が都を覆った。チュッチェフはモスクワへ向かう列車から火事の現場を目撃している。したがってこの詩は、上述のツルゲーネフの『煙』を巡る論争とは関係がなさそうである。

自然の猛威と、それを前に「寄る辺なき子」のようになすすべを知らず立ち尽くす人間との対比である。全てを包み込む無底のカオスとしての煙と、寄る辺なき人間との対比は、チュッチェフの初期の作品「昼と夜」⁴³や「無題（聖なる夜が地平線に上った）」⁴⁴にも登場する、夜の闇の無底と人間との対比に通じるモチーフである。

むすび

今回解説の対象として選んだ詩は、デニーシエヴァの死を乗り越えて帰国した後の1865年からスラヴ会議によってスラヴの民族意識が高揚した1867年にか

けて、Чюच्чефが新たな仕事として汎スラヴ主義に取り組み始めた時期での作品である。初期の彼の作品に於いて顕著なシェリングの影響を残しつつも、当時の政治的事件に対するЧюच्чефの思想をその詩作から伺うことができよう。

注

- 1 *Тютчев Ф. И.* «*** (Ночное небо так угрюмо...)» // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2002-2004 (далее “Тютчев”). Т. 2. С. 151.
- 2 См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 518.
- 3 拙稿「Ф. И. Чюच्чеф政治詩試訳(3)」、『文化と言語』第65号、2006年11月、207-208頁参照。
- 4 «23 ноября 1865 г.» // Тютчев. Т. 2. С. 152.
- 5 “Комментария” // Там же. С. 519.
- 6 拙稿「Ф. И. Чюच्чеф政治詩試訳(10)」、『文化と言語』第73号、2010年11月、32頁参照。
- 7 同書、35-36頁参照。
- 8 Письмо А. И. Георгиевскому от 10-11 декабря 1864 г. // Тютчев. Т. 6. С. 86.
- 9 政治詩試訳(10)、32頁参照。
- 10 同上、35-36頁参照。
- 11 «Князю Суворову» // Тютчев. Т. 2. С. 157.
- 12 政治詩試訳(3)、204-205頁参照。
- 13 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 522.
- 14 См. “Суворов, Александр Аркадьевич” // Русский биографический словарь, С.-Пб., 1912. С. 6-7.
- 15 «*** (Когда расстроенный кредит...)» // Тютчев. Т. 2. С. 159.
- 16 “Комментария” // Там же. С. 524.
- 17 См. “Грейг, Самуил Алексеевич” // Русский биографический словарь, С.-Пб., 1912. С. 425.
- 18 Феоктистов, Е. М. Воспоминания (За кулисами политики и литературы), М., 1991. С. 275-276.
- 19 «*** (На гробовой его...)» // Тютчев. Т. 2. С. 161.
- 20 政治詩試訳(10)、注49、47頁参照。
- 21 政治詩試訳(3)、204-205頁参照。
- 22 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 526.

- 23 «*** (Когда дряхлеющие силы...)» // Там же. С. 162.
- 24 “Комментария” // Там же. С. 526-527.
- 25 *Вяземский П. А.* «Хлестаков» // Сочинения в двух томах. М., 1982. Т. 1. С. 357-358.
- 26 アレクサンドル二世とエカテリーナ・ドルゴルーカヤの関係については、和田春樹『テロルと改革』山川出版社 2005年 31頁を参照
- 27 «*** (Небо бледно-голубое...)» // Тютчев. Т. 2. С. 163-164.
- 28 この異常な好天について、ニキテンコは日記に「不思議な11月だ。こんなものはペテルブルクでは記憶がない」「日陰でも+19℃だ」(12日)と書き残している。マリー来訪当日も好天で「全く夏の日」(17日)だった。
(*Никитенко А. В.* 日誌. Л., 1955. Т. 3. С. 47.) 内務大臣のヴァルエフも「巖かなお興入れは素晴らしい天気のもとで行われた」と日記に記している。
(*Валуев П. А.* 日誌. М., 1961. Т. 2. С. 149.)
- 29 たとえば大公妃エレナ・パヴロヴナは、婚約に当たって息子アレクサンドルのかつての婚約者マリア・エリモヴナ・メッシェルスカヤに対する心残りを思いやっている。(См. *Валуев*. Там же. С. 133.)
- 30 «*** («И дым отечества...»)» // Тютчев. Т. 2. С. 173.
- 31 *Грибоедов А. С.* Горь от ума. М., Эксмо. 2006. С. 27.
- 32 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 537.
- 33 『煙』における「根っからの度し難い西欧主義者」としてのツルゲーネフについては相沢氏の言及がある(相沢直樹「ツルゲーネフとピーサレフ」北海道大学スラブ研究センター『スラブ研究』1990年、37号、53頁参照)。
- 34 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 537.
- 35 “Дым” // Там же. С. 174.
- 36 “Комментария” // Там же. С. 538.
- 37 “Комментария” // Тютчев. Т. 6. С. 500.
- 38 *Достоевский Ф. М.* Письмо А. М. Майкову от 16 августа 1867 г. // Полное собрание сочинений в тридцати томах. Л., 1985. Т. 28. Кн. 2. С. 210.
- 39 «*** (Напрасный труд...)» // Тютчев. Т. 2. С. 181.
- 40 *Аксаков И. С.* Биография Федора Ивановича Тютчева. М., 1997. С. 74-75.
- 41 拙稿「チュッチェフと1867年スラブ会議」、科研費報告集『ロシア思想史研究』2004年1号、参照。
- 42 «Пожарь» // Тютчев. Т. 2. С. 189.
- 43 拙稿「Ф. И. Чулчичев政治詩試訳(5)」、『文化と言語』第67号、2007年11月 102-103頁参照。
- 44 同上、105頁参照。
(本研究は、科研費(基盤研究(B)21330030)の助成を受けたものである。)